

音楽のある園生活を考える

—指導計画に見られる子どもと音楽—

児嶋 輝美

(徳島文理大学短期大学部)

1 はじめに

音楽を保育内容としてとらえるとき、最も大切なことは、それが生活の中の楽しみとしてあることであろう。保育者は、子どもが音楽に親しみ、結果として音楽能力の基礎を培う経験につながるように曲や活動を提示する必要がある。しかし、それは生活の中で子どもの楽しい体験としてあればこそ、心情・意欲・態度の育ちに結びついていくのであろう。

保育の中の音楽にはいくつかの重要な役割がある。第1には音楽によって心が落ち着いたり、気分転換したりストレスを発散したりする癒し的な側面である。第2に、その社会の習俗や文化を受け継ぐ機会にもなっている。伝統的な行事に参加し、美しい詩や旋律をもつ曲を歌い継ぐことは文化を身につけることでもある。第3に、伝統的な童謡や唱歌などは日本語としても美しく、背景にはその時々々の自然や人々の心情がある。歌は言葉や文学とも大いに関連していると言える。第4に、一人ではなく友だちと一緒に歌ったり楽器を鳴らしたりすることへも関心が広がる。そして友だちの歌を聴く、保育者の合唱を聴くなどにも関係していく。音楽を通して他者とつながることは、子どもにとって大きな喜びであるに違いない。

2 目的と方法

実際に保育現場ではどのような実践が行われているのだろうか。ベテランの保育者からは昔に比べると歌ったり楽器を弾いたりしなくなった、という声を聞くことが多い。そこで本稿では、保育所における音楽活動の現状を知り、音楽活動のありかたについて考えた。その手がかりとしたのは保育所の年間の週指導計画である。指導計画の枠組みは「予想される幼児の活動」と「保育者の姿・環境構成」から成る。その中で「音楽」に関連した記述に注目した。

協力を得られたのはA市公立保育所4園、1999年～2003年度の述べ7クラス（5歳児）である。¹

3 結果と考察

(1) 活動の種類と曲

「予想される幼児の活動」には「歌をうたう」「手遊びをする」「リズム遊びをする」などの活動と曲名があげられている。活動の頻度と内容を把握するため

に、「歌」「楽器」「動き」「劇」「鑑賞」の5項目に整理して記入の回数を数えた。集計の結果、年間の週指導計画の中に書かれた音楽活動の数はもっとも多いクラスで60件、少ないクラスで27件、平均すると1クラス当たり42.6件である(表1)。

活動の種類別に集計すると、「歌」が全体の61.1%をしめた。次いで「動き」だが、「歌」とのポイントの開きは大きい。「楽器」「劇」「鑑賞」の項目は非常に少ない。月別に見ると11月12月が最も多いが、これはクリスマス会が発表会を兼ねているためである。「劇」「楽器」はこの時期に集中している。8月9月には運動会での発表に向けて、ダンスやリズム遊びなど「動き」に関する音楽活動が多く登場する。運動会のある10月には練習が中心になるためか音楽活動は少なくなる。1、2月ほどのクラスも少ない。大きな行事を終えて活動に区切り感があるためであろう。

毎月の誕生会や集会は、年齢の違う子どもたちが音楽活動を共有する機会になっている。歌や踊りを披露しあったり、音楽遊びをしたり、保育者のパネルシアターや劇を見たりするなど保育者の工夫が感じられる。

表1 音楽活動の件数(7クラス合計)

	うた	楽器	動き	劇	鑑賞	計
	歌・手遊び・手話ソ	楽器遊び・合奏	リトミック・ダンス	オペレッタ・ミュージック	コンサート・CD鑑賞	
4月	17	2	4	0	0	23
5月	21	0	9	0	0	30
6月	18	1	11	0	0	30
7月	8	0	8	0	0	16
8月	11	3	16	0	1	31
9月	13	0	10	1	1	25
10月	15	0	3	1	1	20
11月	26	5	1	4	1	37
12月	17	8	6	8	0	39
1月	10	2	3	0	0	15
2月	11	3	0	1	1	16
3月	15	0	1	0	0	16
計	182	24	72	15	5	298

歌唱教材やダンス曲も含めて、指導計画に具体的にあげられた曲名の延べ数は、最も多いクラスで年間66曲、少ないクラスで29曲、平均すると46.9曲である。季節や行事にちなんだ曲はどのクラスでも見られ、他は流行や好みを反映しており様々である。

以上から、個々のクラスによって音楽活動の書き表し方、頻度、活動の偏り等の違いはあるものの、共通する傾向が読み取れた。それは①音楽活動の中心は「歌」であり、年間を通して生活の一部になっている

こと、②行事との結びつきが強いことである。

(2) 読み取れる保育者の願い

「保育者の姿」の欄には環境構成や保育者の動き、保育のねらいなどが記述されている。記述は7クラスあわせて125件であった。一つの文章に様々な要素が含まれている事が多いため、単純に分類できないが、指導計画や前後の流れから趣旨を判断すると記述の趣旨は、大きく「指導の方法や手順」「保育者の願い」「行事や生活との関連」の3つに整理することができる。

もっとも多く書かれていたのは「指導の方法や手順」である。「歌いながら手話ができるように、開始前に言葉掛けをする」「遊びの中でCDを流すなどして自然に耳に入るようにしてから歌いはじめる」のように、保育のねらいには触れずに単純に保育者の動きや準備することなどを書いている。「保育者の願い」としては、「楽しい雰囲気の中で歌う事ができるようにする」「上手くできたらほめて自信や意欲につながるようにする」など、活動に取り組む心情や意欲が多くあげられている。「友だちと心を合わせて」など人間関係の育ちを強調した記述も目立った。「行事や生活との関連」では、「おじいちゃん、おばあちゃんへのいたわりの気持ちが育つように歌を練習し～」のように、行事への取り組みについての記述も多く見られた。

「自分のパートをしっかりと歌いつつ、違うパートの歌も意識できるようにする」のように音楽的な内容を具体的に書いたものは非常に少ない。楽器を丁寧に扱う事や、「歌をしっかりと覚えて」など抽象的な表現がわずかに見られる程度である。

(3) 考察

音楽的な活動の機会が少なくなったと言われるが、週指導計画からは音楽を生活の一部としてとらえる保育者の意識がうかがえた。習慣的なものであったとしても、毎週あるいは毎月何らかの音楽活動を週指導計画に盛り込んでいる。特に歌の占めるウエイトが大きい。季節や行事にふさわしい歌、手遊びなどは園生活と切り離せないものになっている。時に行事と結びついて生活の中心にもなるようである。

発表会の前には、「歌」「楽器」「劇」などが指導計画の中心になっている。その機会に少し難しいことに挑戦したり、珍しい楽器を演奏したりすることは子どもの音楽表現への自信や新たな意欲につながるであろう。そして、発表の練習が続く時期にも、保育者は子どもに負担をかけないよう配慮し、一人一人が喜んで参加できるよう援助しようとしている。

しかし、そうした心情や意欲についての記述はどの

クラスもよく似たものになりがちで、生き生きとした保育実践がイメージできないものあり、この点は少し物足りなく感じた。保育者が技術的な指導をしたり評価したりすることもあると思われるが、そうした内容はほとんど書かれていない。単に細かな事まで書く必要を感じていないためかも知れないが、音楽的な価値観を強調することへのためらいもあると推察する。

確かに保育者の願いが強すぎると子どもが楽しめる場合もあるが、子ども自身にも音楽的な気付きがあり、自分なりのイメージにこだわって練習を重ねる事もある。この時、保育者の目指す「心情・意欲」の育ちは、音楽的な能力の育ちと重なりあっている。子どもの気付きを敏感に受け止め、的をえたかかわりをするために、時には音楽的な特徴に目を向けた願いや具体的な方法について書くことも時には必要であろう。

言うまでもなく計画は実践をする前の保育の構想であり、実践後の反省も反映されている。計画と保育実践は循環する営みである。具体的に前もって指導計画を書くことは、保育者の音楽の好みや価値観が文字化することである。そのことで、普段あまり気付かないことが自覚され、子どもへのかかわりを反省する事ができる。そのくり返しが、保育者の独りよがりでも押し付けでもない、個性豊かな保育実践に結びつくのではないだろうか。

4 まとめ

保育者が音楽に期待するものは大きい。7クラスの指導計画からよみとれる保育者の思いを、より確かに保育実践に結び付けるために筆者が提案したい事は以下の3点である。

第1は年間の音楽教材の整理である。「はじめに」であげたような生活の場としての音楽の楽しみを広い視野でとらえ、提示していきたい曲や活動を整理しておく事が必要であろう。第2に、保護者や地域の音楽家の活用である。園でミニコンサートを開いたり地域の盆踊りに参加したりする事は、音楽への興味を広げるだけでなく社会を知る体験にもなる。第3に保育者自身が園生活での音楽を楽しむ事である。保育者が誕生会等で歌や合奏を披露することがあるが、その姿を子どもが見ている事の意味は大きい。子どもも保育者も音楽を楽しみ、お互いの表現を認めあうような関係が築かれるところに、音楽の保育内容としての重要な意味があると考えられる。

※¹2003年度分(1クラス)の1~3月については未集計のため、最終的な結果は当日資料として配付する。